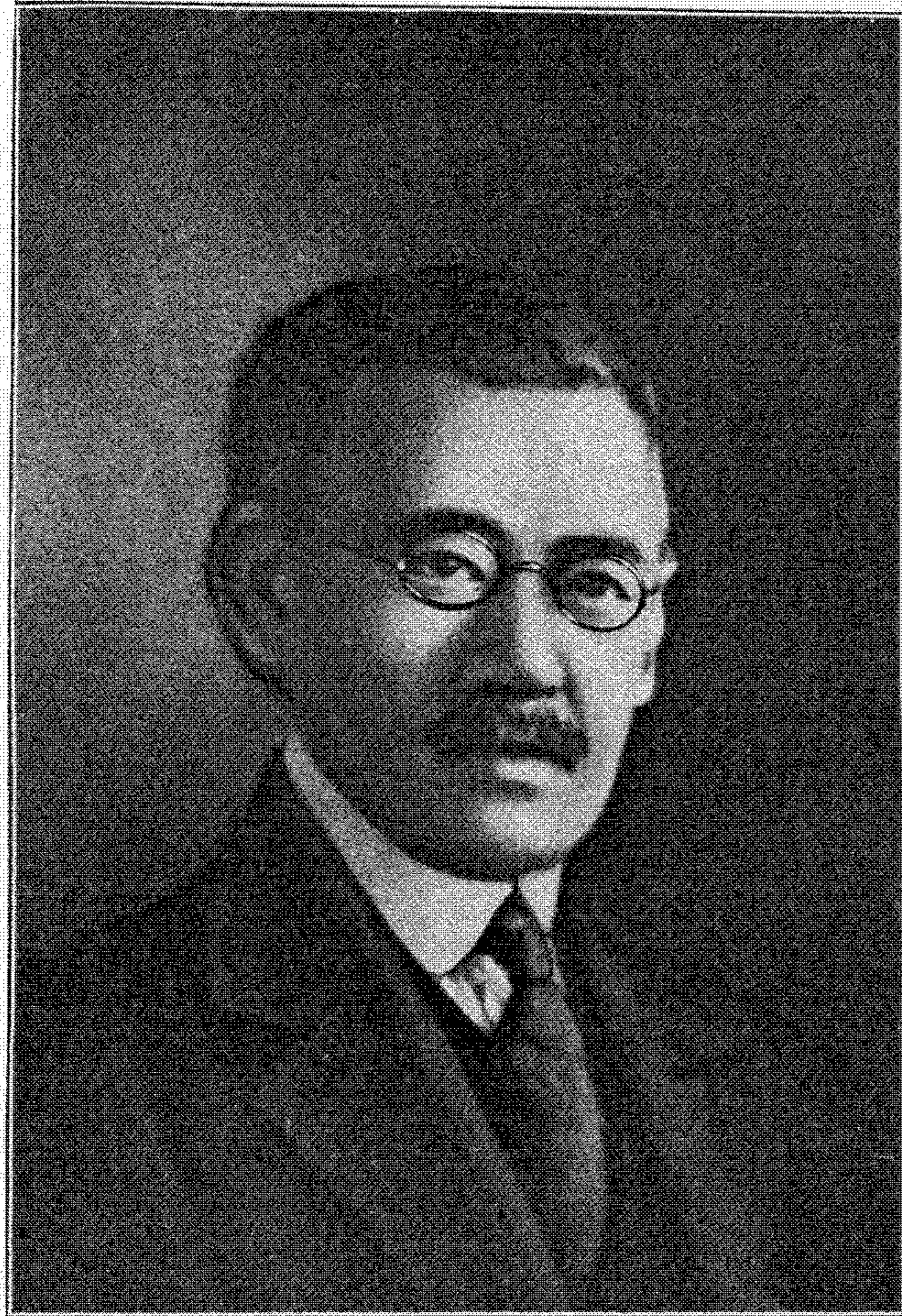


ウ[#]リアム・フ^ホーデン

William Foden



1021



フォーデンについて

ウキリアム・フォーデンは米國生れの最大なるギタリストとして知られる。其門弟にジョージ・クリックをもつて居る事は、彼の誇りとする處であらう。彼は作曲家としても亦可成多くの作品を公にしたが、然しそれは殆んど見るに足るものが無い。要するに彼は演奏家である。然しながら近年の彼には青年の頃の覇氣は見受けられない。惜しむべきである。

ギターのトレモロに就いて

トレモロとは同一のノート或はコードを迅速に反復するの謂ひである。その方法は樂器の種類に依つて夫々異つてゐる。例へばヴァイオリン及其系統に屬する樂器にありては弓を夫々のノートが存する時間中間斷なく迅速に絃の上を上下さす事を云ひ、マンドリン系の樂器に於てはプレクトラム即ちピックを以て絃を迅速に打つ事を云ふ。ヴァイオリン・オーケストラに於けるトレモロは主として劇的又は感情の刹那の發動を表現する爲に用ひられて居る場合が多いがマンドリン系のそれにあつては寧ろ音を長く保持する爲に必要なのである。マンドリン系樂器の本質より云つてその音の振動は寧ろ短いものであるが故に、トレモロなしでは或音を充分に餘韻あらしめる事は一寸不可能である。トレモロは實にマンドリン系樂器の生命とする所である。ギターのトレモロは第一から第四までの指に依つて爲される、第一指

のトレモロはバンジョーに於けるそれと同一であるが時として第二指が第一指の代りに使用される事がある。第二指は第一指より長いと云ふ事からして第一指のトレモロより遙に有效だと云ふ事は勿論である。第一から第二指への變化は此種のトレモロの非常に良い練習である。ギターソロの場合にはトレモロは強い感情を表はしたり、音を長く保持するばかりではなく、演奏に際してその形に色々な變化を與へ、伴奏の場合にはその音に餘韻、變化を與ふるべく効果がある。ギターに於けるトレモロの他の一つの方法は親指と第一指とを交叉させてその第一指の先端で絃を丁度マンドリンのピックを使ふ様に、上下に迅速に打つのである。この方法は柔い音を、特にバスの音を出すに最も適してゐる。

二本の指を用ふるトレモロは第一指と第二指、第二指と第三指と云ふ風に、又はこれと反對の順序で絃を交互に打つ事である。この方法に望しい事は出来るだけ指の運動を早くする事である。三本の指のトレモロを完全に出すと云ふ事は頗る困難

事に屬するけれども熱心なギタリストにとつては凡ての時間と努力とを犠牲にしても十分に習得する價值あるものである、これが流暢に迅速に弾けたなら一つの樂器で旋律と伴奏とが充分に出るから、丁度二つの樂器を弾くと同様の効果があるわけである。またこの外に三本の指を使ふトレモロとしては第一、第二、第三指を交互に使用するものと、第一、第二、第三、第二、第一、第二、第三と云ふ風にそれ等を交互に反復して行く方法等がある。この方法を見るに第二指が第一、第三指に續く、即ち換言すれば第二指は第一、第三指が夫々一度打つ時に二度打つ勘定になるこの方法で弾くトレモロが一番柔く聞える。

此外最近人々に好んで彈かれるトレモロは余の所謂バックワード・ムーザメントである。即ち第三指から始まつて第二、第一指と反對に交互連續して動く方法である。もつとも此方法が一番初めに述べた方法の丁度裏を行く方法である。

四本の指を用ふるトレモロは親指によつて始まり、第一、第二、第三指に依つて續かれる反復運動である。他の方法の様に普通ではないが、これまた獨特の效果があるものである。

要するに斯かる種々の異りたるトレモロの方法を充分に研究し習得すると云ふ事は、「演奏者が自分の思ふがまゝにトレモロを出し得る」と云ふ點に於てのみにも必要且つ充分なるものなるのみならず又これなしでは到底表はし得ないと云ふ美しい音率の變化をも充分に表はし得ると云ふ利益が附隨するに於ては尙更大切である。

ギターの音階練習、及交互運指法に就いて

若し表面的なギター演奏から少しでも奥深く入りたいと希望するならば日々音階の練習を行ふ事が何よりも大切である。練習生が音階練習を何か恐いものゝ如くに急いで通り越して仕舞ふのは極めて普通の事である。

ヴァイオリン、ピアノ其他すべての楽器の練習生は音階は勿論其他のバツセージを爲し能ふ限り完全に彈奏しやうとして其爲に大なる辛苦を厭はない。然るに誠に不思議とも云ふべき程にギターの練習生は之を重要視しない。そして斯かる點に於てギターは他楽器と趣を異にして居て其熟達には音階及其他のバツセージの練習をなすよりも或近い方法があると考へて居るのである。

然し之は大なる誤りである。すべての楽器に就いて何時の世の如何に偉大なる音楽家と雖、此練習を不要だ等と見做した事は決して無い。勿論此音階の練習に依つ

て自分の威嚴を汚損される等と考へた事も決して無い。云ふ迄もなく或場合には特に初心者には、それが甚だ厄介な仕事であるかも知れないが、然しそれだけの報酬は必ず支拂はれる。楽器を我ものとする事に思ひ到れば熱心に之を初め勇敢に之を續行するのが當然ではあるまいか。更に右手の指の交互運動に關して若干の注意を附加したい。交互運指とは絃を撥く指を一つより他は交互に變更する事である。一般の方法は單に第一と第二の指を用ふるもので其場合に依つていづれの指からも初められる。然し此二指のみではすべてのバツセージには適當でない。乃ち屢々第三指が要求されるのであるが之によつて演奏は著しく容易となり又或特殊のバツセージを第一第二の指のみを以て演奏するよりもより圓滑ならしめるのである。特に絃を飛ぶ場合、例へばGより高音のEに飛ぶ場合の如きに於てさうである。又或場合、或バツセージには親指と他の一指及其以上の指の交互法が要求される事もある。

之に依つて各バッセージは考慮の中に行はなければならぬ事が判る。そして一人に適した運指法が必ずしも他人に適當でないと云ふ事も諒解される。要するに交互法を決定すべき規則は無い。何となれば總べては演奏者により又バッセージによつて最都合よき方法を執らるべきものであるから。